河村龍興翁の俳畫

明治以來、ほんとに句境と同じ繪の描ける俳人が幾人あつたであらう　その中にあつて、河村龍興翁の作品は、その稀なる中の隨一であらうと思ふ。いつたい俳句と云ふものは、詩歌の到りつくしたる境地であつて、純朴にして風巡の靈きざるところにその思藻の深さを見るのであるが、その繪に於ても同じことがいへると思ふ、龍興翁の藝術はその至妙境に詩画一体となつて到達してゐるのである簡素なる描線に千萬言の詩韻を帶び、掬めどもつきぬ趣きを見る、しかもその墨彩の賦置の巧みさは現代稀れに見るところである。龍興翁は、文展に構造雄に彫塑家として名をなしてゐるが、私はむしろ俳人としての翁のかくれたる逸才を重く見てゐるものである。翁は天成の土の藝術家である、野草を愛し、自然を愛し、山を住家と考へてゐる。したがつて、描いては水墨画となり、俳句となり、又時に彫塑となるのであつて、翁にとつては、表現は自分方便で、實に天成の自然詩人と云へるであらう。この戰のはなはだしい中に、かゝる樂しい作品の生れることも聖代のありがたさであるが、廣く江湖にお薦めしたいのも、かゝる時局であればこそ一層切なるものがある。

料治熊太

自由さとうまさと

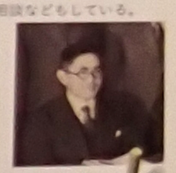
當今好い俳画をかく人が殆どない。俳画は俳句のもつ單純化のコツだけども画となれば、そこに技がいるから、やはり画技としての修練がいる。さりとて、画家は、技に捉はれるから、洒脫輕妙を卑しとする傾きがある。本當の画人にして、本當の俳画をかいたものは、蕪村と栖鳳の二人だけではないかと思ふ。或は之に芋銭子を加へてもいゝかもしれない。龍興君は画人でないところに、画人の到りえない自由さがあり、さりとて素人でないところに、素人の及びえないうまさがある。これが君の俳画をして現代に氣を吐かしめてゐる所以であらう。いや、未だ氣を吐く氣運に到つてゐないかもしれないが、さういふ氣運の將來する期待はもち得る。一日も早くさうさしてあげたい。

荻原井泉水

荻原井泉水（おぎわらせいせんすい）

（1884～1976）

自由律俳句の俳人。昭和に入り俳画の世界に目覚めた目呂二は、昭和13年ころに井泉水の自由律俳句に共感してその門下となった。
同門には尾崎放哉、種田山頭火らがいる。
五七五の定型より自由律の微分的なリズムが、自由人たる目呂二の性情に合っていたのだろう。井泉水主宰の機関紙「層雲」にて、しばしば表紙画や挿画を担当している。
戦後の軽井沢移住後も交流は続き、スケッチを見せたり、出版の相談などもしている。



料治熊太（りょうじくまた）

（1899～1982）

美術評論家、骨董蒐集家。多趣味、博識の人で、面倒見が良く社交性に富み、様々な人物の懸け橋的存在だった。25歳の雑誌の編集者時代に目呂二と出会い、その超然たる人物に心底感銘を受けたと述懐している。
恩師である会津八一と目呂二を引き合わせ、融通無碍に生きるこの二人を「真人」として生涯私淑した。目呂二没後はその死を悼み、すの子と共に「目呂二抄」や句集「自画像」の発刊に尽力した。